

5. 生活科論文

自ら学び続ける授業の創造Ⅲ

活動の価値を実感する生活科授業の創造Ⅲ ～活動への知的好奇心を高める学習指導～



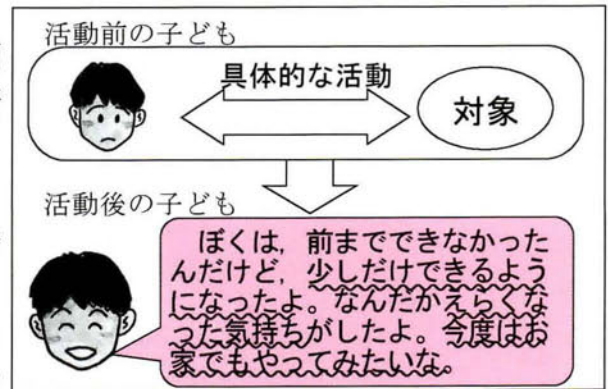
I	研究の立場	63
1	研究の歩み	63
2	研究の方向	63
II	本年度の研究内容	64
1	活動への知的好奇心とは	64
2	活動への知的好奇心を高める学習指導とは	65
3	活動への知的好奇心を高める学習指導の具体化	66
(1)	活動への知的好奇心を高める学習内容	66
(2)	活動への知的好奇心を高める指導方法	67
III	授業プラン例 第1学年「家族大すき大きくせん」	71
IV	研究の成果と課題	73
1	研究の成果	73
2	研究の課題	73

I 研究の立場

1 研究の歩み

わたしたちは、前シリーズの研究で、子どもが活動を広げたり深めたりするために「思考・表現」に焦点を当て、子どもたちが五感を使って試行錯誤するような活動の場を設定して授業の創造を行ってきた。このことにより、子どもたちは、様々な気付きを生み出し、自分の活動を広げたり深めたりして活動を展開するようになってきた。しかし、活動に対して子どもの活動意欲が高まっていたかという点では不十分であった。そこで、子ども自身が単元全体を通して、活動意欲を高めていけるような授業づくりを行うことが大切であると考えた。つまり、「思考・表現」だけでなく「関心・意欲、態度」や「気付き、習慣・技能」の三つの培いたい力の関連性を図りながら、子どもが自ら活動を展開していくような授業を行っていく必要があると考えた。

そこで、本研究では、主テーマを「活動の価値を実感する生活科授業の創造」とおき、研究・実践を行ってきた。まず、1年次研究では、活動の価値を実感する子どもの姿(図1)を、子どもたちが活動に主体的に取り組み、活動で気付いたことを自分の生活に生かしていく姿と設定した。具体的には、内容項目ごとのねらいの本質となる部分やその子なりの見方や考え方を絡めて子どもの姿を想定してきた。また、2



【図1 活動の価値を実感する子どもの姿】

年次研究では、子どもが培いたい力を確かに発揮するために、学習過程に目を向け、単元全体の子どもの思いや願いを大切にしたい授業について考えてきた。特に生活科の授業を行う上で、どのような対象(何)を、どのように(活動)設定していくかという環境設定は重要であることが分かった。そこで、前シリーズまで展開段階を中心においていた環境設定を見直し、学習過程ごとに環境設定を構造化

【表1 学習過程ごとの環境設定の構造化】

(表1)して研究を進めてきた。

その研究の成果として主に次の3つのことが言える。第1に、環境設定を構造化したことにより、子どもの思いや願いに沿った活動が展開され、子どもたちは授業の中で活動の価値を実感することができた。第2に、三つの培いたい力を学習過程ごとに重点化したり、環境設定を行ったりしたことから、それぞれの力の関連性を活動中の子どもの姿等から明らかにすることができた。第3に、培いたい力を確かに発揮させるために、子どもたちがどのようにその力を発揮していくのかを授業前に想定し、活動中に子どもの姿をしっかりと見取った上で指導に生かしてきたことで、指導と評価の一体化を図ることができた。

学習過程	重点化した培いたい力	活動設定の要件
つかむ	関心	対象設定の要件
	意欲	
	態度	
活動する	思考	の要件
	表現	
振り返る	気付き	の要件
	習慣・技能	

2 研究の方向

本年度は、これまでの研究を基にした授業実践を振り返り、その成果と課題を踏まえ、「活動の価値を実感する生活科授業の創造」の研究のまとめをしていきたい。

わたしたちはこれまでに、活動の価値を実感する姿をより表出させるために三つの培いたい力の関連性のみ着目してきた。しかし、活動の価値を実感する姿をより表出させるためには、子どもの思いや願いが連続していくように子どもの「関心・意欲，態度」に着目していく必要があると考えた。子どもは、対象に出合ったときに、知的好奇心から「あれ。」「なぜ。」「どうして。」のような思いを持つ。そして、対象とかかわる中で知的好奇心を高め「こうしたい。」「やってみたい。」等の活動に対しての願い（意欲）を持つと考える。

そこで、本年度は、これまでの目標研究（子どもの姿の具現化）、学習内容研究（研究2年次の成果から、観点を明確にした見直し）も継続しながら、活動の価値をさらに実感させるための指導方法に焦点を当てて研究を進めていくことにした。具体的には、三つの培いたい力をよりよく発揮させるために、三つの培いたい力の原動力となっている活動への思いや願いを内面から支える知的好奇心に着目する学習内容の見直しや指導方法の具体化を行っていきたい。つまり、本年度研究では、目指す子どもの姿を具現化するための学習内容や指導方法を含んだ、本研究テーマの1年次で想定した活動の価値を実感する姿を、より表出させるための学習指導の具体化が必要であると考えた。また、平成20年2月に出された新学習指導要領の重点化された学習内容についても考慮していく必要がある。

よって、本年度は以下のようなサブテーマを設定し、活動の価値を実感する姿をより表出させるための授業づくりを目指し、学習指導の在り方を中心に研究を進めていくことにした。

活動の価値を実感する生活科授業の創造Ⅲ ～活動への知的好奇心を高める学習指導～

Ⅱ 本年度の研究内容

1 活動への知的好奇心とは

活動への知的好奇心とは、子どもが対象に出合ったとき、「やってみたい。」「調べてみたい。」等、対象に価値を見付け、その活動を学びがいのあるものにしていくものである。知的好奇心は、子どもの思いや願いの中に含まれ、実際の授業では三つの培いたい力の「関心・意欲，態度」の姿として表出するものである。子どもたちは、対象に出合ったとき知的好奇心から「あれ。」「おや。」「おかしいな。」「不思議だな。」というような素朴な思いを持つ。そして、対象とかかわる中で知的好奇心を働かせ、「こうしたい。」「やってみたい。」「何とかしなければ。」というような、対象に対して活動意欲（願い）を持つことができる。さらに、知的好奇心を高めることで、子どもたちは活動に対する喜びや楽しみを見出し、活動意欲をさらに高めると考える。そうすることで、対象や自分自身の成長への気付きを持つことができる。さらには、活動を通して気付いたことを生活の中で生かすこ

【表2 知的好奇心の基となる
感覚の基本的な考え方】

感覚の基となる感覚	子どもが感じる気持ち
もつこうしたいというよう有能感	<p>「もつこうしたい。これにも生かせるぞ。」</p> <p>対象にかかわることが自分にとって働きがあったり、役に立ったりするという気持ち。例えば活動後の満足感や達成感がこれにあたる。</p>
活動のよさを感ずるような効力感	<p>「自分にもできそうだなあ。」</p> <p>活動を通して中で、自分の活動に価値を見出し、自分の成長を感じるような気持ち。「自分にもできる」というような気持ち。</p>
活動を自ら見出すような自己決定感	<p>「これなら自分にもできそう。」</p> <p>複数の対象や活動を自分の意志で判断の下、自分の力で決定し具体的な活動に取り組み、その活動を実行させようとする気持ち。</p>
学びの見通しを持つような必要感	<p>「〇〇だからやってみないなあ。」</p> <p>自分の目的意識に対し、様々な条件に出合ったとき、その条件を積極的に成し遂げようとする気持ち。</p>
活動できた自分自身に気付くような有用感	<p>「自分は、こんなこともできたんだ。こんな力があったんだ。」</p> <p>自分のよさを認め、自分を肯定的に受け止めることができる気持ち。受容感に伴って表れてくる気持ち。</p>
学び合いの中で友達に認められるような受容感	<p>「認められる嬉しいなあ。友達と一緒に勉強できて楽しいなあ。」</p> <p>自分の考えや行為が、周りの人に認められたり受け入れられたりしたときの嬉しい気持ち。効力感に伴って表れてくる気持ち。</p>

とにより、自分の生活を豊かにしていくのである。

知的好奇心を内面から支え、子どもたちが具体的な活動を通して感じる喜びや楽しさの原動力となるものが、もっとうちがたいというような有能感、活動のよさを感じるような効力感、活動を自ら見出すような自己決定感、活動できた自分自身に気付くような有用感、学び合いの中で友達に認められるような受容感である。また、これらの感覚とともに常に学びの見通しとして子どもの思いや願いの中にあるものが必要感である。(表2)これらの感覚を学習過程ごとに子どもの姿で見取った際、図2のような感覚の共通性を見出すことができた。その結果、子どもの学びの連続性の中で重点化することができる。

つかむ段階では、対象との出会いによって活動のよさを感じるような感覚(効力感)を高め、自ら活動を見出し、活動への意欲を高めていくような感覚(自己決定感)を味わわせる必要がある。

活動する段階では、対象とかかわることを通して、活動のよさを感じるような感覚(効力感)を味わわせる必要がある。また、友達との学び合いの中で、認められて嬉しいと感じ、友達と共に活動できた喜びを持たせるような感覚(受容感)を味わわせる必要がある。さらに、活動できた自分自身を見つめることで自分自身のよさや活動できた自分自身に気付くような感覚(有用感)を味わわせる必要がある。

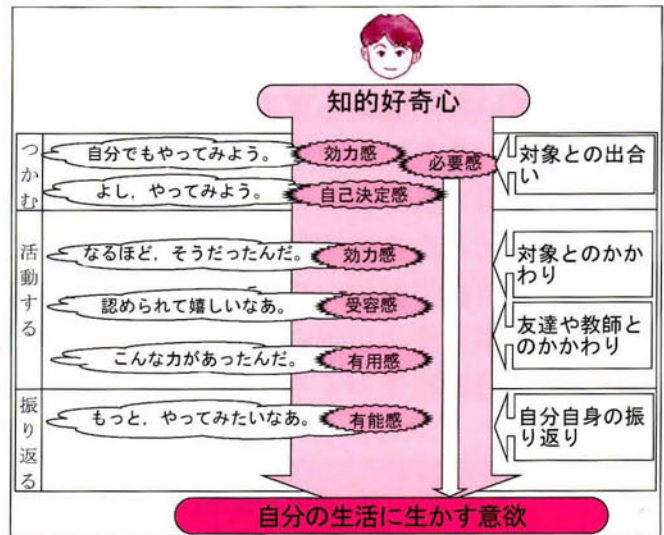
振り返る段階では、今後の自分の生活に生かす意欲を高め、自分の生活に生かしていこうとする感覚(有能感)を味わわせる必要がある。また、これらの学習過程において学びの見通しを持つような感覚(必要感)を味わわせる必要がある。

このように、各学習過程ごとに重点化した感覚を子どもが味わうことで、知的好奇心が高まり、三つの培いたい力もより高めていくことができると考える。また、知的好奇心は、情意面(「関心・意欲、態度」)だけに着目してははその高まりは十分望めない。具体的な活動を通す中で対象とかかわり、試行錯誤して活動することが大切である。そのかわりの中で、対象への気付き、さらには、自分自身への気付きを育み、自分の生活に生かす意欲を高める中で、情意面の知的好奇心が姿として表出してくると考える。つまり、認知面(「思考・表現」「気付き、習慣・技能」)の双方向の関係にも着目する必要がある。

そこで、次のような学習指導を通して、活動への知的好奇心を高めていけると考える。

2 活動への知的好奇心を高める学習指導とは

重点化した感覚を味わわせていくことで、活動への知的好奇心が高まった子どもは、同時に三つの培いたい力を高めていく。そして、その高まった姿は、学習過程の中で、「関心・意欲、態度」として表出される。そこで、1年次に設定した子どもの姿に対して、活動への知的好奇心を着眼点にし、子どもの姿を見取ることで、三つの培いたい力がどのように培われているか見取ることができる。想定した姿に対して確かに高まった姿を見取ることができた場合は、知的好奇心をさらに高める具体的な指導方法(評価方法も含む)を吟味していく。また、子どもたちの姿が想定どおりでなかった場合は、知的好奇心の基と



【図2 学習過程と子どもの知的好奇心の関係】

なる感覚のどの部分が不足しているのかを見取り、その視点から学習内容の見直しを行い、その学習内容の確実な定着のための指導方法を吟味していく。

第2学年「年賀状を書こう」の単元から学習指導について述べる。これまでの実践を振り返ってみると、子どもたちは年賀状を書くことに対しては自分の思いや願いの下、意欲的に取り組むことができた。また、年賀状の書き方についても十分気付くことができた。このことから学習内容については妥当であったと考える。しかし、「相手が喜ぶような年賀状を、心を込めて工夫しながら書くことができる。」という姿を想定したのに対して、実際の授業では、想定した姿には十分表出してこなかった。その理由を活動への知的好奇心の基となる感覚から分析していくと、子どもたちが自分の力で「年賀状を書いてみたい。」というような自己決定感や「感謝の気持ちを伝えるために書くんた。」「相手に喜んでもらいたい。」というような必要感を味わわせる視点から見ると、環境設定は十分ではなかった。つまり、この単元では、指導方法における対象の価値を見出すことができるような対象との出合わせ方を工夫する必要があった。そこで、対象との出合わせ方を工夫し、年賀状のよさについて十分話し合う活動を取り入れて実践したところ、年賀状を書く必要性を感じ、「年賀状を書きたい。」という意欲を高めることができた。



【意欲的に活動に取り組む子ども】

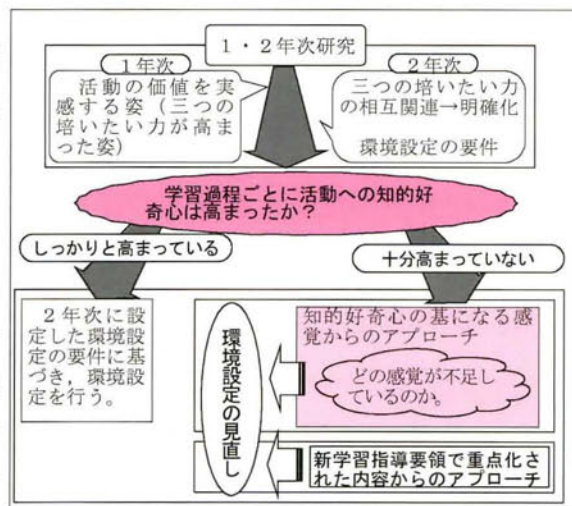
つまり、活動への知的好奇心を高める学習指導とは、子どもたちが活動中にこれらの感覚を味わい、知的好奇心を高めることで、三つの培いたい力を確実に高めるための学習内容や指導方法のことである。

3 活動への知的好奇心を高める学習指導の具体化

活動への知的好奇心を高めるための学習指導を行うに当たっては、まず、1年次に設定した子どもの姿に近づくような学習指導を行っていく必要がある。そのためには、まず、学習目標を明確にした上で、学習内容、指導方法を具体化していくことが大切である。

(1) 活動への知的好奇心を高める学習内容

学習内容については、まず、想定した子どもの姿に対する培いたい力がしっかりと身に付いているか分析をする。その際、培いたい力が十分に高まっている場合は、これまでの環境設定の要件に基づき、環境設定を行っていく。しかし、想定した姿に対して、不十分であった場合は、活動への知的好奇心の基になる感覚のどの感覚が不足していたかを分析した上で、環境設定の見直しを行っていく。(図3)



【図3 活動への知的好奇心を高める環境設定の基本的な考え方】

○活動への知的好奇心の基になる感覚から学習内容を見直した例

第2学年「ミニトマトを育てよう」の単元において、子どもたちはミニトマトの生長や自分自身の成長に気付いてきたが、自分のミニトマトに愛着を持って育てるという姿があまり見られなかった。これは、栽培植物をミニトマトに限定してしまい、子どもた

ちが育てる野菜を選択する余地がなかったからだと考えられる。つまり、「自分で育ててみたい。」「この野菜を最後まで育てたい。」というような自己決定感を味わわせるような学習内容を設定する必要があったからだと考えた。そこで、単元の導入場面で子どもたちが、育てる野菜を自分の力で選択できるような環境設定を行った。具体的には、木市に行き自分で苗を購入するような活動を設定した。そのことにより、子どもたちは、自分の思いや願いで苗を購入し、自分で購入した野菜に愛着を持って栽培活動に取り組んでいた。また、栽培活動においても、「自分の野菜を育て上げることができた。」というような有用感を味わい、さらに「お家でも他の野菜も育ててみたい。」というような有能感を味わうことができ、活動の価値を実感することができた。



【意欲的に活動に取り組む子ども】

また、新学習指導要領で重点化された学習内容も踏襲し、以下のような学習内容も盛り込んでいくことにした。

- 中学年以降の理科の学習を視野に入れ、児童が自然の不思議さや面白さを実感するよう、遊びを工夫したり遊びに使うものを工夫して作ったりする学習活動の充実を図る。
 - 第1学年「おもちゃを作って遊ぼう」や第2学年「おもちゃランドをひらこう」の単元において、動くおもちゃを工夫して作って遊ぶ活動や風を使って遊ぶ活動などを取り入れることで、科学的見方・考え方を培っていくようにする。
- 安全教育に関する指導の充実を図る。
 - 第1学年「楽しい学校」の単元において、自分の登下校について調べる中で、安全に気を付けて登下校ができるように環境設定を行っていく。また、第2学年「ふぞくたんけんたい出発」の単元において、地域への愛着を持たせたり、地域の安全を守ってくれる人々に関心を持たせるような環境設定を行っていく。
- 生命の尊さを実感する指導の充実を図る。
 - 第1学年「きれいな花を咲かせよう」第2学年「大すき やさいさん」の単元や年間を通して設定している「さんぽ」の単元で、植物を自分たちの力で継続的に育てることや自然に直接触れる体験を重視する等して、生命の尊さや自然の素晴らしさを実感するような環境設定を行っていく。
- 幼児教育との連携を図る。
 - 幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るために、第1学年「楽しい学校」で、小学校生活の仕方や友達とのかかわり方を十分に味わえるような環境設定を行っていく。

(2) 活動への知的好奇心を高める指導方法

まず、活動への知的好奇心を高める指導方法として表3のような指導方法の視点を持ち、基本的な考えを設定した。

【表3 活動への知的好奇心を高める指導方法の視点】

指導方法の視点	基本的な考え方
学習過程	子どもが意欲を高め、自らの思いや願いをもち活動を連続発展させ、活動の価値を実感しながら学習を展開するような学習過程を以下のように考えた。【つかむ】→【活動する】→【振り返る】
学習活動	子どもがやってみたくてたまらなくなるような活動を仕組み、楽しく活動に没頭させる。また、気付きを深めるために、活動における学び合いが生まれやすくする。さらに、子どもが対象と直接かかわりながら活動する様相を想定していく。
活動形態	個で活動したり、一斉活動やグループ活動等したり、ねらいを達成するために有効な活動の形態を意味している。また、以下のような考え方で活動形態を工夫していく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人の子どもが自分の考えや工夫のよさを生かした「自分らしさ」を発揮できるような個の体験活動を中心とすること。 ・ 気付きを深めるために、友達との考えの交流が生まれやすくすること。
学習の場	生活科においては、以下のような学習の場を設定することが大切である。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 何度でも繰り返し、対象に触れ、活動や体験を子ども自ら展開していけるようにする。 ・ それぞれの考えや工夫のよさを発揮したときに、活動意欲を高めることができるような調べコーナー、材料コーナー、用具、道具コーナーを常設する。 ・ 気付きを深めるために、友達とのかかわりや交流の生まれる場づくりをする。

教師の具体的な働きかけ	授業中の教師の具体的な働きかけは、問いかけやかかわりを中心に行っていく。詳しくは以下通りである。
問いかけやかかわり	活動中に教師が子どもに問いかけたりかかわったりする際に、以下のようなポイントを大切にしていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが自分なりのよさや可能性を発揮できるような問いかけやかかわり ・ 子どもの活動における取り組み方のよさを感じるような問いかけやかかわり (価値付け・意味付け) ・ 子ども同士の交流を広げたり深めたりするような問いかけやかかわり ・ 自己表現力を付けるような問いかけやかかわり
子どもの活動の評価	活動中は、常に子どもの活動状況を把握し、子どもの実態に応じた(個に応じた)指導を行っていくことが大切である。

また、つかむ・活動する・振り返るの学習過程ごとに、目指す子どもの姿を設定し、それぞれの指導方法の要件(表4)から具体的な指導方法を設定していく。その要件をまとめたものが下のものである。

【表4 活動への知的好奇心を高める指導方法の要件】

学習過程	目指す子どもの姿	要件	具体的な指導方法 ㊦：学習活動, ㊧：場の設定, ㊨：板書, ㊩：活動形態, ㊪：発問	評価 (問いかけ)
つかむ	対象に関心を持ち、自分の生活の中から対象の価値を見出し、対象とのかかわりに目を向け、自分自身の力でその対象とのかかわりを持つような働きかけ	自分の生活の中から対象の価値を見出し、対象とのかかわりに目を向け、活動への思いや願いを高めたいけるような働きかけ	○子どもが対象に出会う段階 ㊦：活動の価値を子どもが見出すことができるような対象との出合わせ方を設定する。(感動的な対象との出会い) ㊧：対象と直接出合ったりかかわったりする場の設定をする。 ㊨：これまでの生活経験を引き出すような発問をする。 ㊩：自分の生活の中から対象を見つめるような発問をする。 ㊪：子どもの一人一人の生活から見つめさせるために個別で行う。 ○対象とのかかわりを高める段階 ㊦：対象とのかかわりを持つ中で、自分の思いや願いを持つことができる場を設定する。 ㊧：自分で対象や活動を選択できる場を設定する。 ㊨：対象の価値に気づき、活動への見通しが持てるような具体的な板書を行う。	・対象に対して自分なりに 効力感 を味わわせるような問いかけを行う。 ・対象との出会いから高まった 効力感 を基に 自己決定感 を味わわせるような問いかけを行う。 ・活動に対して見通しを持ち自ら活動する 必要感 を味わわせるような問いかけを行う。
活動する	対象と深くかかわる中で活動に没頭し、自分の思いや願いを連続・発展させようとする姿	子どもが対象の価値を自分自身と結びつけながら活動を追求しようとする働きかけ	○具体的な活動や体験に取り組む段階 ㊦：自分の思いや願いの下に、対象と繰り返しかかわっていきけるような活動を設定する。 ㊧：一人一人の子どもが、自分の思いや願いを追求できるような場の設定をする。 ㊨：五感をつかって活動する中で、対象への気づきが深まるような活動を設定する。 ㊩：対象に対して気づきを促すような発問をする。(意味付け・価値付け) ㊪：活動に楽しさを見出し、活動が連続・発展するような活動を設定する。 ㊦：活動に楽しさを見出すような活動を設定する。 ㊧：子どもが試行錯誤するような場の設定をする。 ㊨：子ども同士の学び合い、気づきの交流が生まれるようなグループ活動で行う。 ㊩：一人一人の活動のよさが生きる個の活動で行う。 ㊪：活動に見通しを持ち、対象の価値を気付くことができる構造的な板書を行う。	・自分なりの考えから活動できたという 効力感 を味わわせるような問いかけを行う。 ・活動を展開する中で、友達に認められたり認めたりする 受容感 を味わわせるような問いかけを行う。 ・対象とかわる中で、活動できた自分自身に気付く 有用感 を味わわせるような問いかけを行う。
振り返る	これまでの活動を振り返り、自分の成長を感じてさらに自分の生活を豊かにしようとする姿	これまでの活動を振り返ることができ、自分自身の成長に気付くことができるような働きかけ	○活動を振り返り自分自身の成長を見つめる段階 ㊦：これまでの活動を振り返ることができるような活動を設定する。 ㊧：今後の生活の中でさらに対象と深くかかわっていきけるような活動を設定する。 ㊨：自分自身の成長に気付くことができるような活動を設定する。 ㊩：自分自身の成長に気付くことができるような発問をする。(共感・称賛) ㊪：写真やワークシート等を使って、具体的に子どもが自分の成長を振り返ることができるような場の設定を行う。 ㊦：今後の自分の生活の中で、さらに対象への思いや願いを深めるような場の設定を行う。 ㊧：今後の自分の生活に生かしていけるような発問をする。 ㊨：これまでの活動を一目で見ることができるといえるような板書を行う。 ㊩：個で自分のこれからの生活を見つめることができるように個の活動で行う。	・活動できたことへの 満足感 や 達成感 等の 有能感 を味わわせるような問いかけを行う。

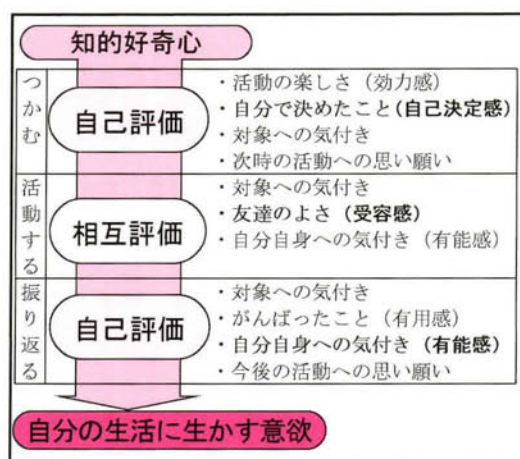
○ 振り返る段階における具体的な指導方法の例

第2学年「おもちゃランドをひらこう」の単元において、これまでの活動を振り返り、自分自身の成長に気付くことができるようにするための要件から、おもちゃランドを開いたままの状態にして振り返り活動を行った。また、おもちゃランドに参加した1年生からの手紙を紹介する活動を取り入れた。これらの活動を取り入れたことにより、子どもたちは、「おもちゃランドを自分たちの力で開くことができた。」「1年生にも優しく接することができたぞ。」というような有用感を味わうことができた。また、「もっと面白いおもちゃを作ってみたい。」「お家でも作ってみたい。」というような有能感を味わうことができ、自分自身の成長を実感することができた。



【自分自身を振り返る活動】

これまで述べてきた指導方法が、より効果的に働くためには、子どもが自分自身を高めていこうとするような自己評価を行う必要がある。そこで、図2の学習過程と知的好奇心の関係を基に、図4のように自己評価・相互評価を関連付けて行うことで、知的好奇心の基となる感覚を味わわせることができると考える。それぞれの段階において、知的好奇心の基となる感覚に対して自己評価を行っていくが、特に、つかむ段階では自己決定感、活動する段階では受容感、振り返る段階では有能感について重点的に自己評価させることで、子ども自身の活動への知的好奇心も高めていけると考える。



【図4 学習過程と評価の関係】

○ 活動への知的好奇心を高める具体的な評価方法（自己評価）の例

自己評価においては、活動後に自分の成長に気付けるような自己評価を行っていく。その際、個人内評価を行い、前時の自己評価との変容に目を向けさせていく。

第2学年「年賀状を書こう」の単元において、活動への知的好奇心を高めるために右のような自己評価カードを作成し評価させた。

具体的には、毎時間活動後に、もっとこうしたいというような有能感（年がじょうはかせになれましたか）、活動を自ら見出すような自己決定感（自分がやってみたくことが決まりましたか）、活動できた自分自身に気付くような有用感（自分の力をはっきりしてがんばりましたか）、活動のよさを感じるような効力感、学び合いの中で友達に認められるような受容感（友だちといっしょにおべんきょうして楽しかったですか）等の感覚を数値化して記入させるようにした。

P8の自己評価カード記入例は、A児の（上からつかむ段階、活動する段階、振り返る段階）である。この子どもは、自分の自己評価から「もっと年賀状について詳しく知りたい。」という願いを持って取り組む中で、郵便局員さんや学校の先生にインタビューする等、意欲的に調べ活動を展開し、年賀状のよさについて調べることができた。さらに、年賀状

○ 今日のがくしゅうをふりかえて(100点満点で点数を付けよう)

①年がじょうはかせになれましたか。	_____点
②自分がやってみたくことが決まりましたか。	_____点
③自分の力をはっきりしてがんばりましたか。	_____点
④友だちといっしょにおべんきょうして楽しかったですか。	_____点

【自己評価カード】

を書く活動においても調べたことを生かして、意欲的に年賀状製作に取り組む姿が見られた。

このことから、単元を通して同じ評価項目で評価させたことにより、子どもたちは活動できた自分自身に気付くような有用感を味わい、自己の成長を実感することができた。さらには、「お家でも年賀状を書いてみたい。」「もっとお世話になった人にも書いてみたい。」というような有能感を味わうこともできた。このように、自己評価においては、毎時間活動後に自己評価させることが大切である。こうすることにより、自分自身の成長に気付け、自分自身の活動を見つめ直す材料にもなった。

このように単元を通して知的好奇心の基になる感覚について自己評価させることで、子どもたちのそれぞれの知的好奇心を評価できると共に、その評価したことを次時の学習の中で教師の指導（問いかけ等）として活用することもできた。

○ 活動への知的好奇心を高める具体的な評価方法（相互評価）の例

活動への知的好奇心を高める具体的な評価方法（相互評価）においては、それらの感覚を味わっている活動中や活動後に相互評価を行っていくことが大切である。具体的には、友だちのよさについて気付いた子どもが、ワークシートや黒板に記入したり、みんなの前で発表したりすることでお互いに受容感を味わうような相互評価を行っていく。

第2学年「年賀状を書こう」の単元において、学び合いの中で友達に認められるような受容感を味わわせるために、年賀状を書いている際や完成した後、年賀状をお互いに鑑賞し合う活動を設定し、相互評価を行った。

具体的には、年賀状を書いている際、友達のよさや、友達の作品のよさを見付けたり、もっとこうした方がよいとアドバイスをしたりする活動を行った。また、できあがった作品を鑑賞し合う活動においても、友達のよさを見付け合う場を設けた。このような相互評価を行ったことで、子どもたちに、「友達に認めてもらえて嬉しいなあ。」「友達の役に立てたんだ。」というような受容感を味わわせることができた。



【書く活動における相互評価】

しかし、自己評価の例のA児は、振り返る過程において③の項目に99点をつけている。このことについて教師が問いかけたところ、「○○さんみたいにもっと上手に書きたい。」と答えた。つまり、相互評価することによって、友達のよさを見付けるとともに、さらに自分自身の可能性を見付けたからだと考えられる。つまり、今まで以上に自己評価力が向上したためと考えられる。

このように互いのよさを認め合う相互評価をさせることにより、子ども自身の自己評価力を高め、子ども自身がさらに活動の価値を実感しようとする姿を見出すことができた。

つかむ	○ 今日のがくしやうをふりかえて(100点まん点で点数をつけましょう。)	
	①年がしよはかせになれましたか。	20点
	②自分がやってみたいことが決まりましたか。	80点
	③自分の力をはつきしてがんばりましたか。	0点
	④友だちといっしょにおべんきょうして楽しかったですか。	50点
活動する	○ 今日のがくしやうをふりかえて(100点まん点で点数をつけましょう。)	
	①年がしよはかせになれましたか。	60点
	②自分がやってみたいことが決まりましたか。	60点
	③自分の力をはつきしてがんばりましたか。	70点
	④友だちといっしょにおべんきょうして楽しかったですか。	100点
振り返る	○ 今日のがくしやうをふりかえて(100点まん点で点数をつけましょう。)	
	①年がしよはかせになれましたか。	100点
	②自分がやってみたいことが決まりましたか。	100点
	③自分の力をはつきしてがんばりましたか。	99点
	④友だちといっしょにおべんきょうして楽しかったですか。	100点

【自己評価カード記入例】

Ⅲ 授業プラン例

家族大すき大きくせん



私の弟を紹介しま
す。



作戦大成功！
やったね。

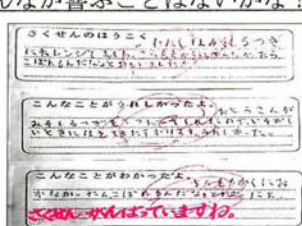



見て見て、こんな
に頑張ったよ。

1 目標

- 家族について紹介する活動や、自分にできる手伝いをする活動を通して、「家族を喜ばせたい」、「家族の役にたたい。」という願いを持ち、自分の家族のことに関心をもって自分から進んで活動することができる。
- 家族のために自分の力で取り組む方法を考えたり、実際に工夫して取り組んだりするとともに、取り組む中で、自分ができるようになったり、気付いたりしたことを分かりやすく表現することができる。
- 家族のよさやそれぞれの特徴、自分が家族の一員としてできることや、自分が家族に愛されていることに気が付き、自分の身の回りのことや手伝い等の適切な技能を身に付けることができる。

4 指導計画(全9時間)

学習過程	主な学習活動	時間
つかむ	<p>・ぼくのお父さんすごく力が強いんだよ。 ・わたしのお家にはかわいい猫がいるんだよ。 ・ぼくは、夏休みに家族みんなで旅行に行ったよ。 ・家族のことをみんなに紹介したいな。</p> <p>家族の楽しい思い出を紹介しよう</p> <p>○ 家族との思い出や家族のことにについて持ってきた思い出の品を見せ合いながら紹介する。 ◇ 旅行・行楽中での思い出 「この写真は、夏休みに家族で旅行に行った時の写真です。この時にぼくは……。」 「このボールは、いつも日曜日にお父さんとキャッチボールをする時に使う……。」 ◇ 日常生活の中でのエピソード 「初めて赤ちゃん(妹)が笑った時、家族みんなで喜びました。そして……。」</p>	2
活動する	<p>・家族のことを紹介するって楽しいな。 ・ぼくのお家はどんなのかな？ ・もっと家族のことを調べてみたいな。</p> <p>家族のことを調べてみんなに紹介しよう</p> <p>○ 家族のことにについてみんなに紹介したいエピソードや特徴を調べて紹介する。 ・ぼくのお父さんはいつも休みの日は、公園でキャッチボールをしてくれます。 ・わたしのおばあちゃんは、すごくお手玉が上手です。いつも教えてくれます。 ・わたしのお母さんは、朝、いつもわたしのおなかをコチョコチョして起こしてくれます。 ・ぼくのお家には、ハムスターがいます。とってもかわいいので、みんなの人気者です。 ○ さらに家族のことに関心を持ち、詳しく調べる。 ★ お母さんの仕事について調べたよ。 ★ 「お父さんのひみつ」をスクープ ★ 「おじいちゃんの特技」をインタビュー 等 ・すごく家族のことが分かってきたよ。 ・いつもあんまり考えてなかったけど、お母さんってすごいんだな。大好き、僕の家族！</p> <p>・何か家族のために、がんばってみたいな。 ・家族のみんなが喜ぶことはないかな？</p> <p>家族大好き大作戦をしよう</p> <p>○ 自分にできることをみんなで話し合う。 ★ 自分のことは自分でやってみよう！ 靴洗い、部屋の片付け、勉強、おもちゃの後片付け等 ★ お手伝いをしよう！ 茶碗洗い、お風呂掃除、靴並べ、部屋のお掃除等 ★ 家族のイベントを考えよう！ 今度、お母さんの誕生日だから誕生会の計画を立てよう。 ○ 具体的に実践の計画を立てる。 ★ いつ、どこで、どんなやり方ですか。</p> <p>家庭での実践の継続</p> <p>○ 自分の実践を振り返ったり、修正したりする。 ・作戦大成功！お母さんから褒められたよ。 ・なんだか、お兄ちゃんになった気分だな。</p> <p>できるようになったことを発表しよう</p> <p>○ 自分が取り組んでがんばったことを発表する。 ○ 冬休みに家族のためにどんなことに取り組むか考える。</p>	5
ふり返る	<p>【子どもが書いたワークシート】</p>  <p>【子どもの作戦を家庭で実践する子ども】</p> 	2

2 育てたいこんな子どもの姿

- ・ 家族に関心を持って、家族のことを深く調べようとする姿。
- ・ 家族のことについて、家族への感謝を感じながら表現しようとする姿。
- ・ 家族のために、自分にできることを考え、自分の力で計画を実践しようとする姿。
- ・ 家族への愛着を深め家族の一員としてこれからも仲良く生活していこうとする姿。
- ・ 家族のよさが分かり、家族のために努力しようとする姿。

3 活動内容の価値

- ～核となる活動：家族のことを調べ、家族のために自分で計画を立てて実践する活動～
- ・ 家族のことについて調べることで、普段自分が知らなかったことを知るにより、さらに家族への愛着が深まる。また、調査活動も子どもたちにとって身近であり、調査活動に対する子どもの意識も高まっていく。
 - ・ 家族のために自分にできることについて考えることにより、家族の仕事にも目を向けることができ、自分のために、周りの家族の人々が様々な仕事をしていることに気付くことができる。また、実践を通して成就感や達成感を味わえる。

※教師の具体的な働きかけの ㊦…学習活動 ㊧…学習形態 ㊨…学習環境 ㊩…発問 ㊪…板書を表す。

教師の具体的な働きかけ	評価（見取りの視点）
 <p>㊦：子どもたちが、自分の家族について見つけ、関心をもたせるために、教師が自分の家族のことについての話をする。</p> <p>㊦：自分の家族について考えたり、調べたり、発表したりすることの楽しさを味わわせるために、2～3名の児童に自分の家族の紹介をさせて、紹介できた児童を教師が称賛する。</p>	<p>○ 家族に関心を持ち、家族のことについて調べてみたいという意欲を持つことができたか。</p> <p>○ 自分の家族をもとに、友達の家族のよさに気付くことができたか。</p> <p>○ 自分が友達に紹介したいものを持ち寄り、家族のことを友達に紹介したいという意欲を高めることができたか。</p> <p>○ 自分の家族について、どんなことを紹介するか、自分の力で決定（自己決定感）し活動に取り組むことができたか。</p> <p>○ 紹介するために必要なことを自分で考え、進んで活動に取り組もうとしているか。</p> <p>○ 各家庭において、家族に対する調査活動に、進んで取り組み、家族のよさに気付いているか、ワークシートやつづやきで見取っていく。</p> <p>○ 自分が調べたことをもとに、進んで表現することができたか。</p> <p>○ 自分の表現活動や友達の表現活動を通して、自分の家族への愛着を深めることができたか。</p> <p>○ 家族のことについて調べたり発表したりする活動を通して、家族のことを学ぶことの有能感を持つことができたか。</p> <p>○ 活動を通して、活動の価値や活動の楽しさ等の有能感を味わうことができたか、ワークシートや発言で見取っていく。</p> <p>○ 終末では、これまでのワークシートを振り返る中で、活動できた自分に気付くことができたか見取っていく。</p> <p>○ 今後の自分の生活に、活動したことをどのように生かしていきたいと考えているか見取る。</p>
<p>【導入での板書例】</p> <p>㊦：子どもたちが自分の思いや願いを持って発表することができるように、事前に家族との思い出の写真や、自分の好きな物等を学校に持ってくるようにする。</p>  <p>㊦：家族のことの紹介では、自分の家族のことについて紹介がしやすいように、画用紙に家族の絵を描かせるようにする。</p> <p>㊦：子どもたちが活動に対して有能感を高めるために、紹介できたことを教師が称賛したり価値付けたりする。</p> <p>㊦：「みんな自分の家族が大好きなんだね。でも、家族のことについてもっと詳しく知りたいと思ったことはありませんか。」</p>	<p>○ 紹介するために必要なことを自分で考え、進んで活動に取り組もうとしているか。</p> <p>○ 各家庭において、家族に対する調査活動に、進んで取り組み、家族のよさに気付いているか、ワークシートやつづやきで見取っていく。</p> <p>○ 自分が調べたことをもとに、進んで表現することができたか。</p> <p>○ 自分の表現活動や友達の表現活動を通して、自分の家族への愛着を深めることができたか。</p> <p>○ 家族のことについて調べたり発表したりする活動を通して、家族のことを学ぶことの有能感を持つことができたか。</p> <p>○ 活動を通して、活動の価値や活動の楽しさ等の有能感を味わうことができたか、ワークシートや発言で見取っていく。</p> <p>○ 終末では、これまでのワークシートを振り返る中で、活動できた自分に気付くことができたか見取っていく。</p> <p>○ 今後の自分の生活に、活動したことをどのように生かしていきたいと考えているか見取る。</p>
<p>㊦：子どもたちが自分の家族について調べてみたいという必要感や効力感を高めるために、昨年度の子どもの紹介の例や、家族から調べる方法等のインタビューの仕方について、その活動の楽しさやよさについて話す。</p>  <p>㊦：子どもが各家庭で自分の家族について、調べる意欲を高めるために、左のようなワークシートを配付する。</p> <p>㊦：インタビューの内容については、自分が家族に聞きたいことを中心に自分で考えさせるが、具体的に何を聞いたらいいか分からない子どもに対しては、以下のような観点を参考に活動に取り組ませる。</p> <p>家族にインタビューすること</p> <p>☆ 好きなことやもの ☆ 誕生日や年齢等について</p> <p>☆ 子ども頃の思い出 ☆ 将来の夢について</p> <p>☆ 今頑張っていること ☆ 等について</p>	<p>○ 紹介するために必要なことを自分で考え、進んで活動に取り組もうとしているか。</p> <p>○ 各家庭において、家族に対する調査活動に、進んで取り組み、家族のよさに気付いているか、ワークシートやつづやきで見取っていく。</p> <p>○ 自分が調べたことをもとに、進んで表現することができたか。</p> <p>○ 自分の表現活動や友達の表現活動を通して、自分の家族への愛着を深めることができたか。</p> <p>○ 家族のことについて調べたり発表したりする活動を通して、家族のことを学ぶことの有能感を持つことができたか。</p> <p>○ 活動を通して、活動の価値や活動の楽しさ等の有能感を味わうことができたか、ワークシートや発言で見取っていく。</p> <p>○ 終末では、これまでのワークシートを振り返る中で、活動できた自分に気付くことができたか見取っていく。</p> <p>○ 今後の自分の生活に、活動したことをどのように生かしていきたいと考えているか見取る。</p>
<p>㊦：自分の家族に愛情を持ち、さらに家族への愛着を深めるために、調べたことをみんなの前で紹介したり、発表したりする。</p> <p>㊦：作戦を立てる際には、自己決定感をもたせるために、自分の力で家族の喜んでもらえそうなことにチャレンジさせる。その際、そのことが家族にとって役に立ち、自分が実践できることかを考えさせるようにする。</p>  <p>㊦：実際に子どもたちが活動するのは、各家庭のため、生活科の時間では、それぞれの家庭での実践をワークシートに振り返らせ、それぞれの取り組みの報告を行う。その際、うまくいったことや心配したこと、活動する中で気付いたこと等をお互いに情報交換することで、次の活動への意欲化を図ることができる。</p> <p>㊦：終末では、自分のこれまでの取り組みを振り返らせ、最後まで家族のために作戦を実行できた自分に気付かせるために、自己評価カードを基に記述させる。</p>  <p>㊦：今後への意欲化を図るために、これから自分が家族のために取り組んでいきたいことを表現させる。</p>	<p>○ 自分が調べたことをもとに、進んで表現することができたか。</p> <p>○ 自分の表現活動や友達の表現活動を通して、自分の家族への愛着を深めることができたか。</p> <p>○ 家族のことについて調べたり発表したりする活動を通して、家族のことを学ぶことの有能感を持つことができたか。</p> <p>○ 活動を通して、活動の価値や活動の楽しさ等の有能感を味わうことができたか、ワークシートや発言で見取っていく。</p> <p>○ 終末では、これまでのワークシートを振り返る中で、活動できた自分に気付くことができたか見取っていく。</p> <p>○ 今後の自分の生活に、活動したことをどのように生かしていきたいと考えているか見取る。</p>

IV 研究の成果と課題

私たちは、「活動の価値を実感する生活科授業の創造」というテーマの下、「具体的な子ども姿」「環境設定」「指導方法」の流れで3年間研究を進めてきた。その結果、以下のような本研究の成果と課題を得ることができた。

1 研究の成果

本年度研究の成果は次のとおりである。

- 単元ごとに、知的好奇心の基となる感覚を洗い出すことにより、学習過程ごとに知的好奇心の基になる感覚を詳しく分析することができた。
- 感覚の洗い出しにより、各学習過程ごとに感覚の共通性を見出すことができた。また、学習過程ごとに子どもたちの姿を想定し、環境設定を行うことにより、子どもたちの学習意欲を高め、活動の価値を実感するような学習指導を行うことができた。
- これまで行ってきた自己評価に加え、相互評価の充実を行ってきたことで、子どもたちは自分の取り組みや友達によさに気づき、さらに、自分の生活を豊かにしようとする姿が見られた。

3年間の本研究シリーズの成果は次のとおりである。

- 3年間の研究により、「具体的な子ども姿」「環境設定」「指導方法」の継続的な研究を行うことができた。
- 情意面、認知面の双方向の関係に着目することにより、三つの培いたい力を高めることができた。
- このような研究を行うことにより、子どもたちは活動の価値を実感し、自分自身の生活をさらに豊かにしようとするようになった。

2 研究の課題

- 新学習指導要領実施に向けて、さらに子どもたちが、人・社会・自然に自らかかわっていくような授業を考えていく必要がある。
- 小1プロブレム等、学校生活に適応を図ることが難しい子どもの実態があることをうけ、幼少連携を含め対象や友達に自分から進んで働きかける力を育む授業を考えていく必要がある。
- 体験活動を通して得られた気づきの質を高め、体験を一層充実したものにし、子ども自身が活動で学んだことを生活に生かしていけるような授業を考えていく必要がある。

《参考文献》

- | | | | |
|---|-------------|-------------------|------------------|
| ○ | | 「小学校学習指導要領解説 生活編」 | (文部省 平成11年) |
| ○ | 中野重人著 | 「生活科教育の理論と方法」 | (東洋館 1990年) |
| ○ | 内藤博愛著 | 「気づきを深める生活科授業の創造」 | (明治図書 2006年) |
| ○ | 日本初等理科教育研究会 | 「初等理科教育4～12月」 | (農山漁村文化協会 2007年) |